

東京藝大の学生と教員が探る

# 「文化的 処方」の 種

「I LOVE YOU」プロジェクト2023ドキュメント

東京藝術大学「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」

東京藝大の学生と教員が探る

# 「文化的処方」の種

「I LOVE YOU」プロジェクト 2023 ドキュメント

いま医療の世界では、西洋医学に基づく治療とは異なる視点で、人の健康や生活を捉えるアプローチが模索されています。また同時に、医療統計学の分野では、文化活動や芸術活動が健康や幸福度におよぼす影響についての研究も進行中です。

2023年春、東京藝術大学を中核とする「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」が発足しました。アート・福祉・医療・テクノロジーの分野の壁を超えて、41の機関（2024年12月時点）が協働的に研究して、人々の間につながりをつくる文化活動「文化的処方」を開発し、社会への実装を試みています。

本書は、東京藝術大学の学生・教員向けに公募した共同研究企画「I LOVE YOU」プロジェクト2023（ケア&コミュニケーション領域）の記録です。2023年度に採択された学生9組、教員6組の全15組の取り組みを紹介しています。「文化的処方」のあり方を模索し、実現を目指す活動ははじまったばかり。ぜひ身のまわりにある出来事と照らし合わせながら、お読みください。

## もくじ

文化的処方を考えるためのスケッチ	03
「I LOVE YOU」プロジェクト2023に見る文化的処方のヒント	11
「I LOVE YOU」プロジェクト2023 特別対談	32
「I LOVE YOU」プロジェクト（ケア&コミュニケーション領域）とは？	36
探してみよう、文化的処方の芽	37
奥付	40

文化的処方を  
考えるためのスケッチ

健康

って、



なんだろう？



世界保健機関（WHO）憲章（1948年発効）において、「健康とは、完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」と定義されています。

一方で、オランダの家庭医で、のちに研究者として活動するマフトルド・ヒューバーは、健康についての新しい概念「ポジティブヘルス」を発表しました。そこでは、健康は「社会的、身体的、感情的な問題に直面した時に適応し、本人主導で管理する能力」として捉えられています。

高齢になれば誰しも多少の不調や疾患はつきもの。世界に先駆けて超高齢社会を迎える日本だからこそ、すべてが完全に良好な状態を求めるのではなく、一緒により良い生活や生き方を目指す姿勢が大切になるのかもしれない。

地域に広がる、

孤独や孤立のひろがり

TOPIC 2

「孤立は、1日15本のタバコに匹敵

するほどの健康リスクがある」と

言われています。現代を生きる私

たちにとって、「望まない孤独や孤

立」は避けては通れない課題のひ

とつ。2018年、イギリスでは、

世界ではじめて孤独担当大臣が任

命されました。

また、医薬品の処方とあわせ、地

域での活動を紹介し、人とのつな

がりを取り戻すことでウェルビー

イングの向上を目指す取り組み「社

会的処方」が広がっています。

孤独や孤立を改善することで、健

康増進や生活の質、ウェルビーイングの向上を目指すこと。この考え

方は、日本においても医療や介護

など、地域のさまざまな現場で実

践されています。

## TOPIC 4

芸術においても1990年以降、「アートプロジェクト」をはじめ、アーティストによる作品制作のかたちも広がりを見せています。文化政策とアートマネジメントを専門とする研究者の熊倉純子は、著書のなかで、アートプロジェクトをこう定義しました。「現代美術を中心に、おもに1990年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動。作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の社会的事象と関わりながら展開される。既

存の回路とは異なる接続／接触のきっかけとなることで、新たな芸術的／社会的文脈を創出する活動」。同時期、世界各地でも「ソーシャリー・エンゲイジド・アート（SEA）」「リレーショナル・アート」など、社会への関心や働きかけを軸にした芸術活動も顕著になっています。

## 社会と応答する芸術活動

「喉の痛みには、はちみつ大根!」「謎の不調に苦しみ、神頼みに」「骨折したら、整形外科へ」など、私たちは日常生活のなかでも、自然といくつかの治療方法を横断しながら生きています。

医療人類学者のアーサー・クラインマンは、医療制度だけではなく、病いや癒しにまつわる行動や信念、人間関係を分析した概念「ヘルスケアシステム」を構築しました。自分自身や家族、友人たちなどの間で行われる「民間セクター」、主に現代医学の専門家による治療を指す「専門職セクター」、整体や鍼灸、代替医療、シャーマニズムなどの「民俗セクター」の3つで構成されており、人々はこれらを行き来しながら、健康の維持や病気の回復に努めると述べています。

## TOPIC 3

## 民間・民俗・専門職を 旅する私たち



芸術活動から社会への働きかけの歴史を紐解くと、古代ギリシャ時代につくられた「エピダウロス」に行き着きます。演劇や音楽のための劇場、温泉や競技場、神殿が一体となった総合的な医療施設である「エピダウロス」に目を

向けてみると、生きる力の回復には、さまざまな分野を横断した活動が必要であると考えられていたことがわかります。

2023年4月、東京藝術大学は、人が生きる力であるアートを根幹に据え、人類と地球のあるべき姿を探究するための組織として芸術未来研究場を設立しました。芸術未来研究場が取り組む6領域のひとつである「ケア&コミュニケーション領域」の「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」では、医療や福祉、地域コミュニティをつなぎ、ウェルビーイングな社会づくりにおけるアートの社会的価値を探究する「文化的処方」の提案を模索しています。

# 「I LOVE YOU」プロジェクト2023に見る 文化的処方へのヒント

## 参考文献

### TOPIC 1

- Huber M, Knottnerus JA, Green L, van der Horst H, Jadad AR, Kromhout D, Leonard B, Lorig K, Loureiro MI, van der Meer JW, Schnabel P, Smith R, van Weel C, Smid H.  
How should we define health? BMJ. 2011 Jul 26;343:d4163. doi: 10.1136/bmj.d4163. PMID: 21791490.
- 長谷川フジ子著「病気があっても健康に！ オランダ発『ポジティブヘルス』：『正常に戻す』から『適応する能力を支援』へ」『The journal of JAHMC』 31巻1号（通号362）（日本医業経営コンサルタント協会、2020年）

### TOPIC 2

- 西智弘編著/西上ありさ・出野紀子・石井麗子 共編/藤岡聡子・横山太郎・守本陽一・森田洋之・井階友貴・村尾剛志著『社会的処方 孤立という病を地域のつながりで治す方法』（学芸出版社、2020年）
- 西智弘編著/岩瀬翔・西上ありさ・守本陽一・稲庭彩和子・石井麗子・藤岡聡子・福島沙紀著『みんなの社会的処方 人のつながりで元気になれる地域をつくる』（学芸出版社、2024年）

### TOPIC 3

- アーサー・クラインマン著『臨床人類学 文化のなかの病者と治療者』（河出書房新社、2021年）

### TOPIC 4

- 熊倉純子監修/菊地拓児・長津結一郎編『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』（水曜社、2014年）

### TOPIC 5

- 稲葉俊郎著『いのちを呼びさますもの ひとのこころとからだ』（KTC中央出版、2018年）

Santé Par la musique Ambiante ～追憶の湯～

8月15日

ピザ窯大煙突プロジェクト

むさしのコレクション ～トキメキ Fashion Week～

クイアと美術のシンポジウム

郊外団地における「とくいの銀行」の実践研究

老後を旅する航海ーデイサービスの生活記録ー

「I LOVE YOU」プロジェクト2023では、超高齢社会などを背景とする「望まない孤独や孤立」に対する解決策として、誰もが取り残されることなく社会に参加できる新たな芸術体験「文化的処方」となるアイデア・表現を研究開発する企画を公募しました。「ケア&コミュニケーション領域」で採択された全15組（学生9組、教員6組）による振り返りとともに、「文化的処方」のヒントを探ります。



伊藤達矢先生（東京藝術大学 芸術未来研究場 ケア&コミュニケーション領域長）

と



内田由紀子先生（京都大学 人と社会の未来研究院 院長）

による感想や一言コメントつき！

KocoGardenプロジェクト

のぼる

「高齢化社会」「子どもと地域」「不登校中高生のための居場所づくり」に  
寄与するアートコミュニケーション・プログラムの開発

アートプログラムを介した子どもの地域交流の可能性

大船渡の介護ケア施設をみんなで彩るワークショップ

みんなでつくる「インクルーシブ・ミュージッキング・コンサート」

ART×SDGsアートプロジェクト

みんなで考える・つくる子ども病院 2023

# 1 Santé Par la musique Ambiente ～追憶の湯～

伊藤 奏でる人の生き方も音に乗せることができる、  
そんな演奏は素晴らしいですね。

内田 懐かしさは心を揺さぶります。  
銭湯ならではの試みだったのかもしれないね。

環境音楽

銭湯でのライブパフォーマンス

杉浦瑛優さん「音楽研究科作曲専攻修士課程」

80代後半の男性に演歌が好きな理由を尋ねたところ、演歌を「日本の心」だと語った。戦後の復興期、人々は想像を絶する苦勞を重ねてきた。演歌歌手の歌声から、芽が出るまでに苦勞を重ねてきたことが伝わってくるそうだ。そんな歌手の歌うワビサビあふれる演歌の歌詞に、当時の若者は自分自身を重ね合わせ、涙を流したという。私は「歌から苦勞が感じとれる」ことに衝撃を受け、音楽が伝えられる事柄の多さを再確認すると同時に、音楽家としての円熟の片鱗を垣間みた。

Q 気づいたことは？

若い頃の記憶を思い出すことと、新しい刺激を受けることは、高齢者の認知機能の低下予防とウェルビーイングの向上につながるという先行研究がある。高齢者へのインタビューをもとに、懐かしさと新しさの両方を感じさせる音楽を創造し、地域の高齢者が集う銭湯で演奏し、ウェルビーイングに与える効果を検証した。自立した生活を送る高齢者が、銭湯という日常的な場で環境音楽によってウェルビーイングが高められる可能性が示唆された。



## Santé Par la musique Ambiente ～追憶の湯～

活動期間 | 2023年8月～2024年3月

開催日時 |

芸術未来研究場展での発表：

2023年11月14日 13:00-14:00、15:30-16:30

銭湯での発表：2024年3月11日 17:30-18:00

実施場所 | 東京都墨田区の銭湯「電気湯」、東京藝術大学大学美術館「芸術未来研究場展」

主な協力者・団体など | 三宮征名（ランカスター大学健康科学部 博士課程）

参加者数 |

芸術未来研究場展での発表：30人

銭湯での発表：22人



Q 気づいたことは？

友人の墓参りに共通の知人と行く様子を撮影するとともに、その知人にインタビューを行い、もう関わることはできない友人と、彼の存在を通して知人との間に生まれた新たな関わりについて考察した。その一方で、8月15日に祖母の家を訪れる様子を撮影し、前年の同日に訪れたときから、1年という歳月で変化した祖母と私、その関係性を記録した。これらの2つの映像素材を、前年に祖母の家で撮影した映像と組み合わせ、新たな映像作品として編集した。

Q なにをしたの？

平田雄己さん「映像研究科映画専攻修士課程」

「LOVE YOU」で実践された他のプロジェクトを見て、自分が行っていたのは極めて個人的なプロジェクトだったんだと改めて思った。時間の経過とともに、人と人との関係性が変化していくこと、作品制作がその流れに逆らったり、揺ぎ乱したりできるということを感じた。作品制作の過程で新たな交流が生まれた別の知人の存在もあり、そうした要素も含めて、継続的なプロジェクトとして、より長尺の作品として成立させることを検討している。

8月15日

活動期間 | 2023年8月～2024年2月

開催日時 | 未公開（作品制作のみ）

実施場所 | 神奈川県横浜市港南区港南台、秩父聖地公園墓地

主な協力者・団体など | -

参加者数 | -



ビデオエッセイ

関係性の記録

8月15日

2

内田 個人的なものの中にも、  
共有的な大きな物語があるかもしれないですね。

伊藤 亡くなった友人とはもう関われなくても、  
その方は決して“過去の人”ではない、  
そう思いました。



撮影：IDE Yoshihiro



## おおみかアートプロジェクト2023

## ピザ窯大煙突プロジェクト

活動期間 | 2023年8月～2024年3月

開催日時 | 2023年12月24日 12:00-18:00

実施場所 | 茨城県日立市JR大麩駅付近のOniwa

主な協力者・団体など |

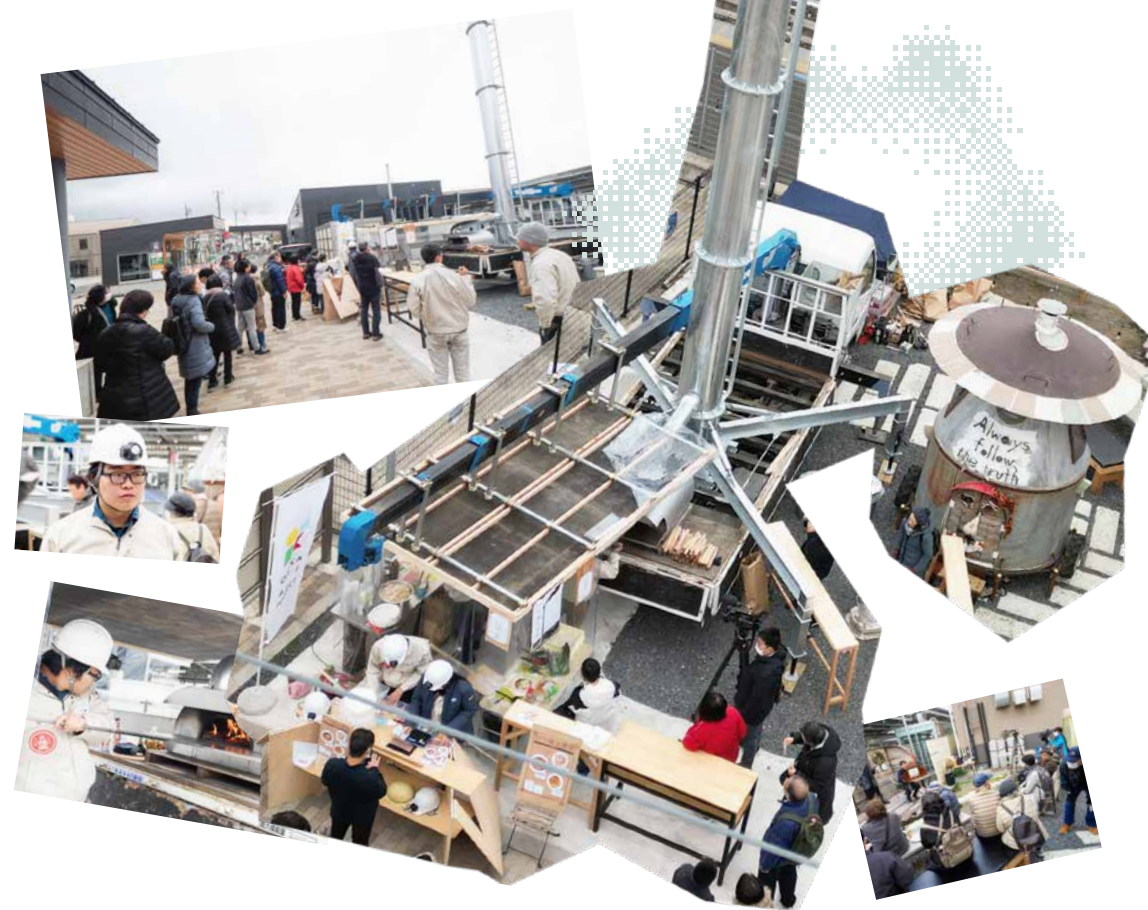
助成：公益財団法人福武財団、元気づくりイベント開催支援補助金、「おひさまの恵みプロジェクト」鈴縫工業株式会社

協賛：アイ・イー・シー株式会社、株式会社ダנק、JX金属株式会社、有限会社小松木工所、株式会社石井工務店、株式会社イノテック、株式会社あずま工房、CANVAS合同会社、大煙突とさくら100年プロジェクト

後援：日立市教育委員会

参加者数 | 250人

なってしまう。ピザを食べることを通じて、地域の歴史や文化を知ったり、大煙突を彫刻作品として鑑賞してもらった機会が生まれた。また、イベントの参加者から「昨年、おおみかアートプロジェクトを知り、今回も参加したきっかけです」と言われ、継続することの意義を感じた。



## Q 気づいたことは？

地域の方々がイベントに参加するきっかけとして、「食」の要素がとても良かった。アートに馴染みのない方々にとって、ただ屋外で作品展示を行うだけでは敷居の高いものに

## Q なにをしたの？

茨城県日立市の職人や工場の技術的な支援を受けながら、アーティストは「日立の大煙突」をモデルにした巨大な彫刻作品を制作した。鋼鉄製のピザ窯でオリジナルピザを焼いて販売したほか、地元の企業や団体の協力を得てワークショップや紙芝居のイベントも行った。地域の職人や住民が「食」というきっかけからアートに触れ、地域の文化やアイデンティティを再確認することを通じて、新たな「煙突を囲んでつくるコミュニティ」の形成を目指した。

浅野ひかりさん「美術学部先端芸術表現科教育研究助手」

内田

食は、面白いつながりですね。湯澤規子（著）『焼き芋とドーナツ 日米シスターフッド交流秘史』をぜひ読んでみたいです。

伊藤

え?! これもアートなの? と、知らないうちに、アートに触れているような体験がとても大切だと思いました。

伊藤

地域に住む人の記憶のなかにずっとあるランドマーク「大煙突」を、コミュニティに引き出すアイデアに驚き。

伊藤 アートの力を活かせる場の広がり期待しています。

## 老後を旅する航海

ーデイサービスの生活記録ー

活動期間 | 2023年8月～2024年1月  
実施場所 | 埼玉県東松山のデイサービス「楽らく」  
主な協力者・団体など | 医療法人社団保順会 デイサービス楽らく、一般社団法人ベンチ「クロスプレイ東松山」  
参加者数 | 30人

老人ホームでの日常的なアート活動を記録し、動画や講座を通じて広く発信し、社会福祉をテーマとするアートプロジェクトの意義について、アートを学ぶ若い世代に提示した。同時に、地理的・身体的な制約から海に出かけられない高齢者に向けて、航海を楽しむためのアートプロジェクトも実施。船を漕いで魚を釣るなど、運動とアートを組み合わせた活動により、新しい刺激とコミュニケーションをもたらすことを試みた。

芸大生や美大生など、アートを学ぶ若い人々と交流して、彼らが福祉の現場にあまり足を運んでいないという事実を知った。ワークショップに参加した経験はあっても、日常生活の場での参与観察が不足しているため、福祉の現場で直接的な経験を積み、より深い理解を促すことの必要性を実感。また、高齢者を単に機能が低下した人として捉えるのではなく、その存在や経験の価値を認識することの重要性も感じた。

Q なにをしたの？

Q 気づいたことは？

桂融 さん「美術研究科先端芸術表現研究領域 博士課程」



体操トレーニング

インスタレーション

昭和ファッション

世代間交流



## むさしのコレクション

～トキメキ Fashion Week～

活動期間 | 2023年9月～2024年1月  
開催日時 | 2023年11月6日、11月30日、2024年1月5日、1月6日  
いずれも13:00-18:00  
実施場所 | 東京都武蔵野市「武蔵野プレイス」  
主な協力者・団体など | 太田由貴子、山下大輝（インフルエンサー）、Mao（フォトグラファー）  
参加者数 | 10人、展示会来場者数：約130人

Q なにをしたの？  
高齢者にとって懐かし、若者にとっては逆に新しい、レトロファッションを媒介とした3日間の交流イベントを企画・運営した。福祉をテーマに医学部の学生と立案し、昭和カルチャーを発信するインフルエンサーが監修を担当。昭和ファッションをテーマに、世代を超えた交流を実現。1日目は対話を通じてコーディネートを考え、2日目はモデル体験、3日目はギャラリィで写真展示を行い、約130人が来場した。

Q 気づいたことは？  
ファッションが世代を超えた絆を生む力を持つことを強く実感した。思い出話や憧れを語り合う場面では、高齢の方たちの目が輝き、若者たちも新たな発見に心を躍らせていた。「古希を前に、ずっと挑戦したかった格好でモデル体験ができて良かった」という感想も。一人ひとりが主体的に楽しみ、自分の輝きを認識している姿を見たとき、単なる交流の場を超えて、参加者全員にとって特別な瞬間を創り出せたと感じた。

野瀬美怜 さん「映像研究科映画専攻修士課程」

内田 バラバラにならずにつながりをつくったのは、なぜでしょう？

伊藤 集まった人たちで、すべてをつくり上げてゆく楽しさが伝わります。

むさしのコレクション～トキメキ Fashion Week～

近藤銀河さん [美術研究科先端芸術表現研究領域 博士課程] | モチェ・レ・サンドリヨンさん  
[美術研究科先端芸術表現専攻 修士課程] | 寺田健人さん [美術学部先端芸術表現科 助手] |  
今村春陽さん [美術学部先端芸術表現科 学士課程] | 百崎楓丘さん [美術学部先端芸術表現科 学士課程]

クィア

美術

## クィアと美術のシンポジウム

## クィアと美術のシンポジウム

活動期間 | 2023年10月～2024年3月  
開催日時 |  
ワークショップ: 2023年10月23日 17:50-20:00、シンポジウム: 2024年3月24日 13:00-18:00  
実施場所 | 東京藝術大学 上野校地 (中央棟 第一講義室など)  
主な協力者・団体など | 品田玲花、松本夏織、鳥海あかり、天野知香、久保豊、松浦優  
参加者数 |  
ワークショップ: 11人、シンポジウム: 359人



上: 浦野貴織  
中央: 天野知香  
下: 品田玲花



## Q 気づいたことは？

講演者の語りには、これまで研究や実践を軽んじられたことへの悔しさが滲むものも多く、それを忘れてはならないと思った。参加者からは「こういう会を求めている」「こういう講義を聞きたかった」という痛切な声も多く、改めて、芸術大学や美術の世界では、フェミニズム、クィア、ジェンダーといった観点から美術を見つめ、学べる機会が、極めて乏しい現状を実感。今回の取り組みは、美術教育、美術界に対する問いかけでもあった。

## Q なにをしたの？

「クィアやフェミニズムと美術の関係について学びたい」という我々学生の切実な願いから、ワークショップとシンポジウムを開催した。前者では、差別を減らし互いを尊重し合える空間「セーフスペース」について学び合う場を創出。後者では、さまざまな研究者や大学院生をゲストとして招き、クィアと美術の観点からアセクシユアル、レズビアン美術、ゲイ・アーカイブス、レズビアン小説、少女マンガなど幅広いテーマでの講演を行った。

内田

それは驚きました。美術系の方がより機会があると思っていました。

## 郊外団地における

## 「とくいの銀行」の実践研究

創造的関係を生み出すコミュニティの自生を目指す実践とリサーチ・インタビュー

活動期間 | 2023年8月～2024年3月

開催日時 |

事例実践: 2023年10月22日 10:00-17:00、2024年3月24日 13:00-16:00、オンラインインタビュー: 2023年10月9日、10月25日、10月31日いずれも 19:30-21:00 2024年3月19日 12:30-14:30  
実施場所 | 取手井野団地 (茨城県取手市)、オンライン (北海道白老町、シンガポールほか)

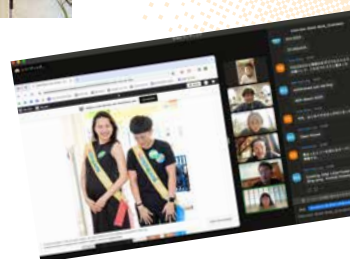
主な協力者・団体など | いこいの+TAPPINO運営委員会、取手井野団地自治会、Drama Box (シンガポール)、取手市 (高齢福祉課・文化芸術課)、UR都市機構

参加者数 |

事例実践 (周年イベント): 85人、インタビュー: 10人



提供: 深澤孝史、取手アートプロジェクト



## Q なにをしたの？

アーティストの深澤孝史や地域住民と協働して、取手アートプロジェクトが2011年から緩やかに運営を続けていた。「とくいの銀行」。人の「とくい(得意・特異)」を運用する銀行型アートプロジェクトの活動を捉え直すため、コロナ禍を経て対面での活動が徐々に戻る団地で、事例実践と効果検証を行った。北海道白老やシンガポールの郊外団地などで「支店」をひらいた人々にインタビューも実施。市民の創造性や個性を引き出す仕組みと価値を可視化することを試みた。

羽原康恵さん [社会連携センター特任助教]

## Q 気づいたことは？

貯金ならぬ「ちよとく」の際は、誰かにやってあげることでも嬉しくいられるような、「個人の特性」や「個人の癖のようなもの」が預けられる。「誰かの目に留まって引き出されるなら喜んで」という期待を含む受け身の姿勢は、この銀行が始まった頃から現在まで変わらない。人材バンクのようではあるけれど、もっと曖昧なもの。欲や要望ではなく、好奇心をフックにして地域の人のつながりを生むものだと思惑している。

伊藤

「とくい」を引き出すときって、かなりドキドキそう。

内田

どういう人が「ちよとく」をしてくれたのか、知りたいです。

人のとくい(特異・得意)

銀行型アートプロジェクト



## KocoGardenプロジェクト

活動期間 |  
2023年8月～10月  
開催日時 |  
展示会：2023年9月29日～10月29日  
実施場所 | 神奈川県横浜市中区黄金町  
主な協力者・団体など |  
Salikhain Kolektib、Tasai、  
黄金町エリアマネジメントセンター  
参加者数 |  
イベント：50人、展示会：200人

Q 気づいたことは？

KocoGardenを通して、私たちは誰一人として、みんなで協力し合うよりも、うまくやる方法はないと思った。KocoGardenで起こった出来事、会話、つながり、ホスピタリティ、歓迎、それらすべては、KocoGardenに訪れた人々の想像力が結集して生まれたもので、私の想像を超えるプロジェクトになった。住居でもスタジオでもない第三の場所として、人々が交流できる場を設けたことで、アーティストたちにもコミュニティの感覚が育まれたと感じた。

内田 居心地の良さをづくり出す工夫がすごいですね。



提供：the Artist and Koganecho Area Management Center

Q なにをしたの？

黄金町で滞在制作を行うアーティストと地域住民をつなぐため、KocoGardenプロジェクトのアーティストたちは、イベントやワークショップ、食事会、飲み会、カラオケ、交流会などを2か月にわたって開催。アーティストと地域住民がそれぞれの活動や関心を共有できる場を提供した。最後には「Koganecho International Artist's Network 2023」の一環として展示会を実施した。

伊藤 ありそうで、そんな場所はなかなかない。



クロエ・パレさん「国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻博士課程」  
平河伴菜さん「キュレーター」  
アリウエンさん「キュレーター」

Q なにをしたの？

Q 気づいたことは？

境遇の異なるアーティストとキュレーターが、精神面のケアについてナラティブを構成し、「のぼる」と題するZineを制作した。クイアZineを専門に取り扱うDig A Hole Zinesにて、リリースイベントを開催。Zineを手に取り、自身の記憶や生き方について話し合える場を設けた。「芸術未来研究場展」ではZineを展示。カーペットと照明があり、Zineの読み上げ音声が行われるなかで、自分のペースで読める空間を用意した。

ある来場者の「海の波が山にどく」という感想が印象的だった。Dig A Hole Zinesのイベント後、TOKYO ART BOOK FAIRで陳列されたり、クイアネスと多様なエコロジーという共通の関心をテーマとするアテネ美術学校、早稲田大学ジェンダー・セクシュアリティセンターなどにZineを提供した。ニューヨークのPrinted Matter, Inc.、香港のアジア・アート・アーカイブにも所蔵され、反響を受けて次号を制作中。



撮影：楊凱文 (Yeo Kai Wen)



ZINE

対話の場

のぼる

活動期間 | 2023年10月～2024年3月

開催日時 |

のぼるZineのリリースイベント：

2023年10月14日15:00-20:00

展覧会：2023年11月10日～26日

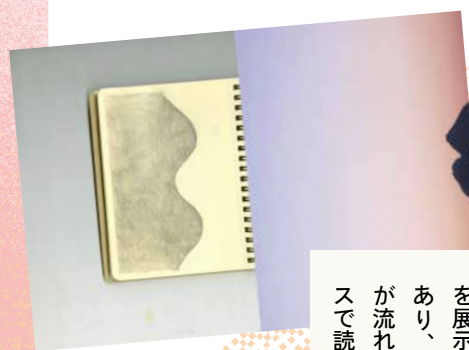
実施場所 |

のぼるZineのリリースイベント：Dig A Hole Zines

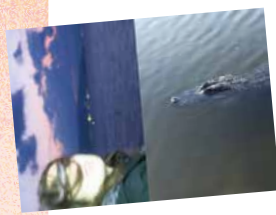
展覧会：東京藝術大学大学美術館「芸術未来研究場展」

主な協力者・団体など | -

参加者数 | Zineのリリースイベント：70人



撮影：楊凱文 (Yeo Kai Wen)



熊倉純子さん「国際芸術創造研究科教授」・箕口一美さん「国際芸術創造研究科教授」

Q なにをしたの？

Q 気づいたことは？

SDGsの理念「誰一人取り残されない」を目指して、3つの喫緊の社会課題「高齢化社会」「子どもと地域」「不登校中高生のための居場所づくり」にアートを通じて取り組んだ。それぞれの課題に関わる福祉団体と連携し、カスタマイズした芸術体験プログラムの開発について協働的に思考・実践を行った。プログラム間の相互交流を図りながら進めることで、より多角的・複眼的な視点を持って推進することができた。

アーティストに加え、実演家やスタッフとして関わった学生と卒業生、文化施設や公共機関、民間団体の職員など、さまざまな属性の人々でプログラムを作り上げた。「ルーティンになりがちな福祉の制度と発想の枠を気持ちよく打ち破ることができた」「絶対ムリだと思ったが、やってみたら意外とできて楽しかった」という声もあり、地域のウェルビーイングを芸術文化で支える場やネットワークの形成につながると考えている。



撮影：中川周



撮影：中川周

「高齢化社会」「子どもと地域」「不登校中高生のための居場所づくり」に寄与するアートコミュニケーション・プログラムの開発

活動期間 | 2023年8月～2024年3月

1) 高齢化社会「アートで多世代交流」

開催日時 | 2023年9月25日、11月27日、2024年1月29日いずれも10:00-11:00

実施場所 | 中部地域会議室

主な協力者・団体など | (一社) 谷中のおかって、ムジタンツ、NPO法人LAND FES、地域包括支援センター関原(足立区)、中部ひまわり保育園、生活介護事業所らっこかん  
参加者数 | 67人

2) 子どもと地域「アートなお祭り」

開催日時 | 2023年9月18日13:00-17:00、2024年2月25日13:30-16:30

実施場所 | 保木間小学校 体育館および教室

主な協力者・団体など | あだち子ども支援ネット、足立区内母子生活支援施設  
参加者数 | 153人

3) 不登校中高生のための居場所づくり

開催日時 | 2023年12月20日  
実施場所 | 東京藝術大学千住校地7ホール

主な協力者・団体など | NPO法人カタリバ アダチベース、NPO法人キッズドア  
参加者数 | 29人



撮影：中川周

喫緊の課題

アート

# 12 大船渡の介護ケア施設をみんなで彩るワークショップ

伊藤

誰もが知っている花だけど、それぞれに違う思い出がきつとある。

## 大船渡の介護ケア施設を みんなで彩るワークショップ

活動期間 | 2023年10月～2024年3月  
開催日時 | 2023年10月14日、15日  
9:00-16:00  
実施場所 | 岩手県大船渡市のグループホーム「ひまわり」と介護老人保健施設「ひまわり」  
主な協力者・団体など | 社会福祉法人典人会、岩手県立大船渡高校美術部  
参加者数 | 60人



岩手県大船渡市のグループホームで、藝大生と大船渡高校美術部の生徒が、施設の外壁にひまわりの絵を描いた。翌日は隣接する介護老人保健施設にて、美術部の生徒や施設の利用者とスタッフ、その家族に、藝大生がデッサンや色のつくり方を教えるワークショップも実施。その後、「能登の震災復旧などでボランティア活動をするスタッフのために、Tシャツとジャケツトをデザインしてほしい」という要望があり制作した。

アートの成果は作品のみならず、つくるプロセス自体がさまざまな人々とのコミュニケーションになる。東京から来た藝大生、認知症の高齢者、美大をめざす高校生、介護施設のスタッフ、地元の子どもたち……みんなはじめて会うのに、絵を描く行為を通して短時間でつながる現場を参加者全員が体験できた。その記憶が施設の外装として残り、施設を明るく飾るという機能を保ち続けているという、実りの多いプロジェクトだった。

Q なにをしたの？

Q 気づいたことは？

藤崎圭一郎さん「美術学部デザイン科教授」

介護施設

ペイントワークショップ

アートなお祭り

自分屋台づくり



撮影：中川周

## アートプログラムを介した 子どもの地域交流の可能性

活動期間 | 2023年8月～2024年3月  
開催日時 |  
(1) 事前ワークショップ：  
2023年8月30日、9月6日、  
9月13日 15:00-17:30  
「アートなお祭り」：2023年9月18日  
13:00-17:00  
(2) 事前ワークショップ：  
2024年2月10日、2月15日、  
2月21日 15:00-17:30  
地域交流イベント「アートなお祭り」：  
2024年2月25日 13:30-16:30  
実施場所 | 足立区内小学校  
主な協力者・団体など | あだち子ども支援ネット、足立区内母子生活支援施設  
参加者数 | 153人

地域課題に寄与するアートプログラムに関するアクションリサーチを実施。地域の子どもを取り巻く大人と協働しながら、子どもが抱えている課題の抽出とプログラム開発に取り組んだ。具体的には、子どもがアートを介してゆるやかに交流する機会として、東京都足立区内の小中学校で「アートなお祭り」を開催。アーティストと子ども、子ども同士の間で、言葉に限定されない多様なコミュニケーションや交流の場が生まれた。

美術・音楽・ダンスのアーティストによる複数のコンテンツを自由に回遊できる「お祭り形式」にしたことで、地域の子どもが多数参加し、多様な子どものニーズに応じたプログラムを実施できた。子どもが自ら作った屋台で「作品」を愛でたり交換し合ったり、ダンサーの磁石のような動きに引き寄せられて踊ったり、ヴァイオリンの演奏に合わせて歌い出したり。これまで出会ったことのない大人に触発される子どもの姿が見られた。

Q なにをしたの？

Q 気づいたことは？

酒井雅代さん「国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻博士課程」

アートプログラムを介した  
子どもの地域交流の可能性

伊藤 親でも先生でもない大人に出会う機会はとても大切ですね。

内田 楽しそうです！

スマートフォン

ミュージッキング



## みんなでつくる「インクルーシブ・ミュージッキング・コンサート」

活動期間 | 2023年8月～2024年3月  
開催日時 | 2023年10月15日、11月12日  
15:00-16:00  
実施場所 | 東京藝術大学アーツ&サイエンスラボ棟  
4F 球形ホール、大学美術館「芸術未来研究展」  
主な協力者・団体など | 社会福祉法人かたるべ会  
参加者数 | 300人

スマートフォン演奏者、楽器を演奏する音楽家ともに「とても楽しい！」と好評だった。楽器が演奏できる／できない、また障害の有無を問わず、ともに音楽を奏で、楽しんでいく様子が、「ミュージッキング」の未来の広がりを予感した。コンサートの開催を通して、音楽の演奏を通じた協働の可能性が見出せたことは、何よりも大きな成果だった。

Q 気づいたことは？

音楽家クリストファー・スモールによる「ミュージッキング（音楽は、『行為』である）」という言葉がキーワードに、「インクルーシブ・ミュージッキングコンサート」プロジェクトを実施。スマートフォンと楽器を用い、楽器の演奏ができる／できないの垣根を超えた合奏の仕組みを開発した。横浜にある社会福祉法人かたるべ会と協働し、藝大内にあるアーツ&サイエンスラボ棟（産学官連携棟）と大学美術館にて、2度のコンサートを開催。

Q なにをしたの？

吉井瑞穂 さん「音楽学部器楽科准教授」・古川聖 さん「美術学部先端芸術表現科教授」

伊藤 演奏者と観客との垣根が溶ける体験が生まれましたね。

内田 面白いですね。音を鳴らすというのが原点でしょうか。

伊藤 職員さんの希望をかたちにするプロセスをデザインされていますね。

## みんなで考える・つくる 子ども病院 2023

活動期間 |  
2023年8月～2024年3月  
開催日時 |  
30周年記念祭垂れ幕づくり（現地制作）：  
2023年10月7日、8日 9:00-16:00  
りんごの木の照明設置：2024年3月30日  
15:00-20:00、31日 10:00-14:00  
実施場所 |  
長野県立子ども病院（長野県安曇野市）  
参加者数 |  
30周年記念祭垂れ幕づくり：60人  
りんごの木の照明設置：3人

病院の30周年祭で掲げる垂れ幕をみんなでつくりたいという職員さんの希望を受け、ワークショップを企画。子どもや家族、職員が、ハンカチに幾何形態のシールを貼って、模様や文字を自由にデザインできるようにした。その後、職員や藝大チームが色を塗り、垂れ幕として完成。また、廊下の一部を明るくするため、りんごの木の形をした照明作品を制作。シルエットは丸みをもたせ、木材の温かい印象を出すようにした。

病院では未だにコロナの影響が大きく、集まって制作することが難しい。そのため、看護師や家族と協働して、ベッドで個々に制作してもらったが、丁寧な作品づくりができたようだ。看護師が作品を見ながら、「さまざまな感情を一旦横に置いて、目の前に集中し創造している表情がとてもいいと思った」と話してくれた。また、廊下の印象が明るくなり、照明の前で患者や家族、職員が話す様子を見ることが増えた、という声も。

Q なにをしたの？

Q 気づいたことは？

丸山素直さん「美術学部デザイン科テクニカルインストラクター」

## 現代の鳥獣戯画

## 子ども

## ワークショップ

©2023 ART × SDGs Art Project



©2023 Nowadays Cho-ju-Giga Art Project

## ART × SDGs アートプロジェクト

地域におけるアートの学び場づくり

活動期間 |  
2023年8月～2024年3月  
開催日時 |  
アートの学び場：2023年8月～2024年3月の日曜日（全19回）9:00-17:00  
美術館で学び場の子どもたちと実施するワークショップ：2023年11月19日 14:30-17:00  
実施場所 | 東京都渋谷区のアートの学び場、神奈川県横浜市の高齢者介護施設、東京藝術大学大学美術館「芸術未来研究場展」  
参加者数 |  
アートの学び場：16人、美術館で学び場の子どもたちと実施するワークショップ：30人、美術館に設置したスタンプワークショップ：約240人

Q なにをしたの？  
小中高校生を中心に、大学生からシルバー世代を交えて「地域におけるアートの学び場づくり」を主宰。導入では鳥獣戯画の鑑賞、模写、創作を行う「現代の鳥獣戯画アートプロジェクト」を援用し、子どもの学びに向かう力を美術で引き出すことを試みた。参加者の作品をつなげて絵巻に仕立てるワークショップを実施。成果の一つとして高校生と中学生主体のスタンプワークショップを美術館で行った。

Q 気づいたことは？  
「つながりの可視化」と鑑賞・創作・批評の場の創出を目指した一連のアートワークショップでは、「楽しい」「これが「探究」だよ！」という声も。子どもたちの主体性が育まれ、学びが深化し本人が実感できる経験を提供できた。若年層にも孤独が広がる現代にアートを介して「つながり」をつくる意義と美術教育の可能性を見出した。現在は、10代から102歳までが協働するプロジェクトへ展開中。

秋本瑠理子さん「美術研究科芸術学研究領域（美術教育）博士課程」

内田 どんなものか気になりました。

## 子ども病院

## ともにつくる

# 14 ART × SDGs アートプロジェクト

伊藤 学びの深まりが喜びになるのはとても素晴らしいですね。

内田 夢中になっている瞬間ですね。

みんなで考える・つくる子ども病院 2023

文化心理学研究者・内田由紀子先生と考える、

## 日常に溶け込む文化的処方役割と可能性

話し手…内田由紀子

「京都大学 人と社会の未来研究院 院長／教授」

聞き手…伊藤達矢

「東京藝術大学 芸術未来研究場 ケア&コミュニケーション領域長／社会連携センター 教授／共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」プロジェクトリーダー」

医療や福祉、地域のさまざまな現場で、文化や芸術はどんな役割を果たしているのでしょうか。「LOVE YOU」の実践を踏まえ、文化的処方を推進する伊藤達矢先生が聞き手となり、文化心理学・社会心理学を専門とし、芸術が人の心にも与える影響や幸福感について研究する内田由紀子先生とともに考えていきます。

人の心を動かし、  
リフレクションする芸術

伊藤…藝大の教員や学生が取り組む事例を見ていただきましたが、いかがでしたか？  
内田…すごく面白く拝読させていただきました。私は心理学者として、文化芸術が人の心にも与える影響に関心を持っています。ですが、「芸術には人の心を大きく動かす力がある」と今回改めて感じました。一枚の絵や5分の音楽にも、人が人生のなかで感じる悲しみや怒り、喜び、切なさといった感情が凝縮されていますよね。そして、そうした作品を鑑賞することには、人生を振り返るような体験がたくさん含まれているなと思いました。  
伊藤…そういう試みも多いですね。  
内田…リフレクション、つまり自分一人ではうまく捉えられなかった感情が作品として表現されることで、自分自身の体験が再定義されるんですよね。そのときに人は感動したり、カタルシスを感じたりするのでしょう。でも、芸術をつくり出す側のアーティストは、そこは、どのくらい意識的なのでしょうか？

伊藤…意識的かどうかは、アーティストによってそれぞれですが、自分の心が動いていることはたしかだと思います。人によってはワクワクだったり、怒りだったり、どんな方向性であっても、その人の熱量があって、それがかたちになったときに観た人との共鳴や共振が起こっていく。

内田…熱量が伝播するわけですね。

伊藤…再現性や客観性を重視するサイエンスとの違いから考えると、アートは個人的なことを起点にしていることが多いですね。なにかと出会ったことで、自分のなかでモヤモヤしたものが生まれる。それと向き合いながら、個人的なことをずっと掘り下げた先に、誰かとつながる水脈を掘り当てることがあります。それによって人は安心感や勇気をもらえます。

内田…そうですね。一方で社会心理学的な観点で視野を広げると、同じ作品を鑑賞する他者の存在や、その反応も含めた鑑賞体験によって、鑑賞者同士の間に居場所のようなものが生まれていく。そうした居場所がもっとわかりやすく目に見えるかたちで、個人から個人へ連鎖することが極めて重要だと考えています。

私のささやかな幸せは、  
私だけのもの？

伊藤…「QOL（クオリティ・オブ・ライフ）」も大切だけど、互いに差し出し合うことでそれを支えるコミュニティの質を高めることも重要ですよ。僕たちは、それを「Quality of Community（クオリティ・オブ・コミュニティ）」と呼んでいます。

内田…そもそも人間って、まわりや人からの影響にはすごく敏感で、「こんなことを言われた」「自分の発言に対して」冷たい態度を取られた」と言う人は多い。しかし、一方で、実は自分が相手や社会に与えている影響に関しては鈍感な人がものすごく多い。伊藤…国や文化でも違いがあるんじゃないか。  
内田…アメリカやイギリスの企業での調査では、「自分の幸せは、その後どのようなインパクトがありますか？」と尋ねると、「自分の幸せは、会社全体に影響を与えて、全体の生産性をあげるはずだ」と大きな視点で話をする人もいます。また、台湾の人に聞いてみると、「私が嬉しいと、家族が幸せになってくれる」と答えるんです。一

文化や芸術の価値を測る

伊藤…「文化や芸術には可能性がある」と語る一方で、具体的なデータやエビデンスで測る取り組みはまだ十分ではない現状もあります。しかし、文化的処方を社会に浸透させていくためにも、改めて「文化や芸術の価値」をきちんと証明していく必要性を感じています。

内田…先日、建築家の方とも同じような

テーマについて話す機会がありました。建築も造形的な部分が話題になることが少なくないですが、竣工後はそのなかで訪れる人々により社会活動が行われます。一方で、完成後にユーザーの声を収集したり、行為や活動が測定されたりすることは非常に少ないと。でも私自身、素晴らしい図書館を訪れると、いつも以上に本に手を伸ばしたくなることを実感して、「これは測れるんじゃないか？」と思ったんです。

伊藤…なるほど。どう測るのでしょうか？  
内田…たとえば、「本を読みなくなったか」「今まで読んでいた分野とは異なる本を手に取りたくなったか」など行動レベルの指標でもいいですよ。あるいは退館後に「ああ、今日はいい体験をした！と思ったか」という主観の指標でもいいかもしれません。感想を超えたデータが収集できると、行動変化と空間のつくり方との関係も要因分析できるんじゃないかと思うんですよ。伊藤…行動の変化やその連関に目を向けることが大切なんですね。

内田…神経美学にも注目しています。私が在籍する「京都大学 人と社会の未来研究院」の研究者でもある上田竜平さんは、芸

と、別の場所に置かれた絵では鑑賞者の受け取り方がどう変わるのかも気になりました。まだはじまったばかりの取り組みだと思いますが、伊藤先生は、文化的処方を通して、どんな社会を描いていますか？

伊藤…藝大という場で実践していることを鑑みると、ひとつのかたちとしては、現在のアーティスト像が更新されていくといいなと考えています。というのも藝大を卒業しても、十年、二十年と経つと、半数近い卒業生たちが「アーティストになることを諦める」という言い方で、芸術と関わることをやめてしまうんですね。「もう何年も個展をやってないから、俺はもう作家をやめてるよ」と。でも僕は「本当にそうか？」と思うんですね。

内田…「やる」「やらない」の境界線が明確に引かれているんですね。

伊藤…まさに。一般的に、芸術大学で芸術を学ぶことは、芸術家になるためのステップアップとして位置づけられることが多いんですね。でも芸術を学んできたことの活かし方って、もっと幅広くあるべきです。そもそも文化芸術はさまざまな物事の根幹にあって、そこから社会が豊かになる可能

術作品を観たときの脳活動をMRIで測定しているんですね。実際、心理学の実験でも、美しい絵や造形美を観ると、向社会的行動（他者を助けようとする）が促されるという研究もあります。そこには、ただ「美しいものを見て心地良い」という快樂だけでない、なんらか別の心の動きがあるはずです。そういうメカニズムがわかると、また別の視点から作品を評価することもできるんじゃないかと思います。

伊藤…そうですね。ありがとうございます。「LOVE YOU（以下、I・L・Y）」に参加した学生や教員が自らのプロジェクトを振り返るときのコツがあれば教えてください。

内田…やはり「参加して、どうでしたか？」と聞くと、感想を集めるにとどまります。そこで、あらかじめ、参加後に予測される行動変容のチェックリストを作成するのはいかがでしょうか？たとえば、「普段外に出ることが少なかった人が、外出することが増える」「これまで読まなかったタイ

プの本を読むようになった」など。伊藤…なるほど。事前に作成しておくのがポイントですね。

内田…直接的な影響かはわからないけれど、

性を秘めているものだと思います。だから、芸術家II作品をつくる人ではなくて、そうやって自分のクリエイティビティを活かして、医療や福祉などさまざまな現場で活動していく人たちが、芸術家としてもっと増えていってほしい。社会からもそういう役割が求められて、アーティストの意味が広がることで、この場はもっと豊かになるんじゃないかな。

内田…お話を聞きながら、鷲田清一さんが語っていた哲学カフェの話思い出しました。哲学者も芸術家と同様に、ある種のステレオタイプとしての「哲学者」像があった、その枠を破るのは難しい。でも本来的に哲学が問うているのは、人間が生きていくうえで抱える怒りや喜び、悲しみってなんなんだろうとか、そもそも生きるってなんだろうとか、日常的な思索の延長にあるはずなんですよ。だから、私たちは人間の営みとしての哲学的な問いを専門用語を使わなくても十分に考えることができるし、そうした意味では、広く哲学者と言える人たちがたくさんいるんじゃないかと。伊藤…専門性が高い「哲学」を、誰もが気軽に参加できる場をつくることで身近なも

知らないうちに行動が変わっていたというようなデータが集められるといいですね。また、一次的な変化だけではなく、二次的な変化も含めていいと思います。「プロジェクトに参加して音楽に触れたことによって、音楽を聴くようになり、散歩をする機会が増えた」など連鎖的な行動もリスト化して、参加後に、その増減など変化を尋ねることも有効かなと思います。

#### 芸術家II作品をつくる人？

内田…改めて、アートプロジェクトは、「場所を選ばない」ということにも可能性を感じました。私が小さい頃は、芸術作品に触れようと思ったら、美術館に行くしか選択肢はなかったように思います。

伊藤…今回は公募をきっかけに、自ら場をひらいていくようなアイデアが集まりました。その結果、いわゆる美術館やギャラリーではない、銭湯や学校、福祉施設、はたまたビザパーティーなど、地域のなかに突然、芸術に触れる場が出現するようになることが起こったわけですね。

内田…心理学的には、美術館に置かれた絵

のにしているんですね。哲学者の職能を拡張するというよりは、すべての人がもつ「哲学する力」を信じることで成り立っている。内田…さまざまな活動によって裾野が広がるということがありそうです。たとえば、近年は技術系の企業から、大学に対して「哲学をもう一度勉強したい」といった相談をいただく機会も増えました。

伊藤…たしかに「芸術家」や「芸術する力」にも応用できそうです。引き続き、I・L・Yでの実践を続けながら、文化的処方の種を育んでいけたらと思います。

#### 内田由紀子

京都大学教育学部卒、人間・環境学研究科修士、博士（人間・環境学）。京都大学こころの未来研究センター助教、准教授、教授、スタンフォード大学フェロー等を経て、京都大学 人と社会の未来研究院院長。主著に「これからの幸福について…文化的幸福観のすすめ」（新曜社）。

#### 伊藤達矢

東京藝術大学大学院芸術学専攻 美術教育 修士、博士（美術）。東京都美術館×東京藝術大学のアートコミュニケーション形成事業「とびらプロジェクト」など、多様な文化プログラムの企画立案に携わる。東京藝術大学社会連携センター教授。共著に「ケアとアートの教室」（左右社）。

# 探してみよう、文化的処方<sup>3</sup>の芽

「文化的処方」を考えるためのヒントは、日常はもちろん、  
さまざまなメディアのなかにも隠れています。  
「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」で  
研究開発に取り組む8名が見つけた文化的処方の芽をご紹介します。

選者〔五十音順〕：伊藤達矢（東京藝術大学社会連携センター教授）、稲庭彩和子（国立アートリサーチセンター主任研究員）、  
川畑秀明（慶應義塾大学文学部人文社会学科教授／東京藝術大学客員教授）、桐山孝司（東京藝術大学大学院映像研究科教授）、  
平諭一郎（東京藝術大学未来創造継承センター准教授）、田邑元一（ヤマハ株式会社研究開発統括部／東京藝術大学客員教授）、  
福本壘（長岡造形大学地域協創センター センター長 准教授／東京藝術大学客員教授）、古川聖（東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授）

自然に身体を使う  
重要性  
「ヒロシちゃんねる」  
ヒロシ



©ヒロシ・コーポレーション

2



抑圧からの解放を  
圧倒的な美しさで魅せる  
《LOVERS—永遠の恋人たち》 古橋悌二

1



『ムーミン全集【新版】1 ムーミン谷の彗星』  
トーベ・ヤンソン（著）

孤独とともに生きていくための  
『ムーミン』シリーズ（講談社）  
トーベ・ヤンソン（著）

6



オンラインでつながる  
写真・動画コミュニティ  
「屋根裏」 高澤けーすけ



会話ベタにも楽しいアクティビティ  
そば打ちサークルは寡黙な  
コミュニケーション？  
——ChatGPT との対話ログ



5



みんなが集まる  
手段としての  
ワイン  
「TOKYO WINE PARTY」



4

平諭一郎



1 トーベ・ヤンソンの人生と、ムーミン・シリーズで描かれたキャラクターたちの生き方は、他人のことを気にせずに、孤独とともに生きていく指針になります。

2 一人間の根源的な美しさを体感するメディア・アート。少数派の葛藤や社会のなかでの生きづらさという抑圧から解放され、自己肯定を促す作品です。

3 ソロキャンプがなぜ流行しているのだろう。身体性、自然、地方、不利益など、このチャネルには未来に必要な手がかりが詰まっています。

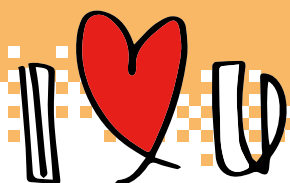
田邑元一



4 ワインを楽しむことで得られるリラックス効果や、ワイン会を通じた社交的な活動がメンタルヘルスに良い影響を与える可能性に注目しました。

5 一人だけでつくって食べる一連のプロセスにはどのような意味があるか知りたくて、ChatGPT相手に壁打ちしてみました。その一例を紹介します。

6 一数年前に立ち上げられたコミュニティの紹介です。誰もが手軽に写真を撮って共有できる時代に生まれる新たな活動のヒントになりそうです。



## 「I LOVE YOU」プロジェクト（ケア&コミュニケーション領域）とは？

東京藝術大学の教員・学生を対象とする共同研究企画公募事業。  
アーティストの発想力を活かした文化的処方を研究開発します。

東京藝術大学が2019年度より展開する企画公募事業「I LOVE YOU」プロジェクト。「世界を変える創造の源泉」として、芸術が持つ無限の可能性を社会に向けて伝え、実践によって示すことを試みてきました。2023年度から「ケア&コミュニケーション領域」での募集枠を設け、超高齢社会などを背景とする「望まない孤独や孤立」に対する解決策として、誰もが取り残されず社会に参加できる新たな芸術体験「文化的処方」となるアイデア・表現を研究開発する企画を募集。アーティストの斬新な発想力を活かして、多様な人たちのつながりを育む取り組みが、各地で実践されています。2023年度は、全15組（学生9組、教員6組）の取り組みを採択。本冊子では、「ケア&コミュニケーション領域」で選定された15組のプロジェクトを紹介しています。

### 2023年度助成概要

#### 申請資格・対象・助成金額

- ①東京藝術大学の正規課程に在学する学生が主催する企画（1件につき20万円以内）
- ②東京藝術大学に所属する教員・研究者が主催する企画（1件につき100万円以内）

#### 審査・選考

芸術未来研究場ケア&コミュニケーション領域の教員・研究者等が

①～④の観点により審査および選考を行いました。

- ①本公募事業の趣旨・目的に合致しており、社会にインパクトを与えることが期待される。
- ②内容や着眼点に独創性があり、各芸術分野の特性を踏まえた高度な研究や実践が期待される。
- ③ケア&コミュニケーション領域が求める企画内容に合致している。
- ④予算の積算が妥当であり、実施に必要な条件が準備できていると見込まれる。

学生による企画には、メンターとして研究支援者が配置されました。

メンター（2023年度）：上平晃代、杉山陽介、田中一平

#### 募集期間

2023年5月25日～6月30日

#### 研究企画の実施期間

2023年8月1日～2024年3月31日



本プロジェクトは、東京藝術大学が中核となり41機関が連携した「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」（通称：ART共創拠点）による、福祉・医療・テクノロジーを融合したアートコミュニケーションによって、誰もが「自分らしく」を実現できる共生社会を目指す試みの一環です。詳細はWebサイトをご覧ください。  
<https://kyoso.geidai.ac.jp>

7

古く深い、花と人間との関わり  
池坊や草月流などの華道、蜷川実花などのフォトグラファー

花を愛でる、花に親しむ

ソフィ・カ  
ルなど

他者の痛みを感じる

8

10



アートと社会とウェルビーイング  
を訪ねるウェブマガジン  
「ああともTODAY」  
国立アトリサーチセンター  
東京藝術大学



13



漫画家と精神科医のコラボ  
『ウツバン』消えてしまいたくて、た  
まらない』(新潮社 バンチコミックス 有賀  
あやこ)

川畑秀明



7 花と人間との関わりは人  
類史に古い痕跡が見て取れま  
す。花は自然だけでなく、人  
の生活の趣味や文化の一部で  
もある。花を通して新しい自  
分を世界を垣間見たい。

古川聖



8 一人の人が痛い思いをする  
シーンを見るだけで、自分も  
他人の痛さを経験する。最近  
の研究では痛さを知ること  
で共感力が高まるということが指摘さ  
れています。

13 一実は、これは東京藝大  
生が匿名で描いたものです。  
自殺願望者の心の動き、取り  
巻く環境などが漫画により立  
体的に感受され、精神科医と  
一緒に注意深く、やさしく、  
ウェルテル効果などにも配慮  
しつつ表現が選ばれ、興味深  
く読み進むことができます。

聾、難聴の  
奥深い世界  
「難聴うさぎ」



14

稲庭彩和子



9 誰も知っていないマン  
ガ・アニメ「ドラえもん」  
のび太は怠け者で苦手なこと  
も多いけど自分の弱さを肯定  
して助けを求める強さもあり  
ます。そんなのび太を助ける  
秘密道具も必見。

14 YouTubeというメデイ  
アを有効に使って聾者、難聴  
者の不思議な世界に触れるこ  
とができる、楽しさと不思議  
さと新鮮な驚きに満ちた動画  
コンテンツ。

10 ミュージアムや文化財が  
まさに健康資源でもあるとい  
う「文化的処方」の国内外の  
事例を多数掲載。

15 アートにおいて表現のた  
めのメデイアがもつ制限とは  
本質的なもので、制限とのせ  
めぎ合いを通して表現は抽象  
化されアートとなります。  
健常者とされる人たちの演劇  
をモデルとしない、障がいと  
されるものを制限(アートの出  
発点)とする一方で、新しい  
様式が生み出されているよう  
に思います。



photo by bozzo  
障がいではなく……  
「態変」金満里ほか



11 心が明るく穏やかになる  
という視点で選んだ世界の名  
画53点を優しい言葉で深く解  
説。「美術はわからない」と  
思う方こそ、ゆるりと読めて  
楽しめます。

15 アートにおいて表現のた  
めのメデイアがもつ制限とは  
本質的なもので、制限とのせ  
めぎ合いを通して表現は抽象  
化されアートとなります。  
健常者とされる人たちの演劇  
をモデルとしない、障がいと  
されるものを制限(アートの出  
発点)とする一方で、新しい  
様式が生み出されているよう  
に思います。

39

9



「ドラえもん 1」

自分の弱さを肯定する強さを信じる  
『ドラえもん』シリーズ(小学館)  
藤子・F・不二雄

マインドフルネスのトレーニングを  
26枚の名画を使って紹介  
『はじめてのマインドフルネス』26枚の名  
画に学ぶ幸せに生きる方法(紀伊國屋書店)  
クリストフ・ファン・ドレ(著) 坂田雪子(監修)  
翻訳 繁松緑(翻訳)



12

16



「ワンダフルライフ」Blu-ray・DVD  
バンダイナムコフィルムワークス  
© 1998 ワンダフルライフ製作委員会

自分を見直すきっかけとしての撮影  
「ワンダフルライフ」是枝裕和(監督)

19



社会人と藝大生が共に学ぶ  
多様性の講義録  
『アートと社会の教室』(左右社 東京藝術大  
学 Diversity on the Arts プロジェクト 編)

22



本当の豊かさとは何かを考える  
きっかけになる1冊  
『ウォールデン 森の生活』  
(KADOKAWA/角川文庫)  
ヘンリー・D・ソロー(著) 田内志文(翻訳)

桐山孝司



16 本プロジェクトでは、映  
像に記録されることを機に自  
分を前向きに見直すことも、  
文化的処方のひとつと考えて  
います。その話題が出る時に  
に思い出すのが、カメラを前  
に一番大切な思い出を語って  
もらうこの映画です。

20 一人の最晩年、豊かに生  
きることを、人や自然とつなが  
ること、「年を重ねる」とに  
美しく生きる「人生」が映し出  
された作品。ナレーションは  
樹木希林さん。

福本壱



17 教育や医療などの社会制  
度が極度に進むとそれ自身が  
目的化するという問題意識の  
もとに、多様性を重視した共  
生社会を模索する。芸術の力  
による文化的処方と方向性を  
同じくしています。

22 一文明がもたらす「利便性」  
に対し疑問を投げかけ、森の  
生活を記述し、さまざまな考  
えに触れながら、人間が本来  
感じることのできる豊かさ  
について考えを深めることが  
できます。

17



共生の観点からの社会課題の考察  
『コンヴィヴィアリティのための道具』  
(くま学芸文庫) イヴァン・イリイチ(著)  
渡辺梨佐(訳)

20



豊かに人生を終えるための羅針盤  
「人生フルーツ」伏原健之(監修)

23



志ある住民の活動を支える  
科学者の姿勢を示す1冊  
『市民環境科学への招待―水環境を守る  
ために』(裳華房 小倉紀雄(著))

24



小さな木こそが文化的処方かも!?  
『あるきだした小さな木』(偕成社 テル  
マ・ホルクマン(著)、シルビー・セリ  
グ(イラスト)、花輪莞爾(翻訳)

見えない数字を推理して、  
初対面も家族も笑顔になれる作品  
推理と駆け引きの数字当てゲーム  
ドメモ DOMEMO (知冬舎)  
アレックス・ランドルフ



伊藤達矢



19 東京藝術大学でひらかれ  
る履修証明プログラム・愛称  
DOOをまとめた1冊。授  
業の様子、講師や受講生たち  
の声から、アートとケアの重  
なりが読み取れます。

23 住民が身近にある水環境  
を保全していく活動を学術的  
な視点からどう支えていくか、  
その姿勢を学べる1冊。

24 自分が持っている「見え  
ない数字」を読み当てるボー  
ドゲーム。相手の考えを察し  
たり、相手に勘違いさせたり、  
さまざまなコミュニケーション  
が生まれる作品です。

39

38

東京藝術大学

ART 共創拠点



東京藝大の学生と教員が探る「文化的処方」の種「I LOVE YOU」プロジェクト2023 ドキュメント

発行日：2025年1月23日 発行：東京藝術大学「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」

監修：伊藤達矢 企画制作：西尾咲子、山崎日希

編集：多田智美 (MUESUM)、白井瞭 デザイン：仲村健太郎、小林加代子 (Studio Kentaro Nakamura) イラスト：仁太郎

印刷：シーズクリエイト

\*本冊子は、JST 共創の場形成支援プログラム(JPMJPF2105)の支援を受けたものです。

